

振り返れば六甲の山並み～あの頃の友に会いたい

第9回 神戸大学&文学部ホームカミングデイ2014

— Kobe University Homecoming Day 2014 —

10/25(土)

神戸大学ホームカミングデイ2014

出光佐三記念六甲台講堂(登録有形文化財)
12:00頃～ティーパーティー(記念式典終了後)

※詳しくは 下記のホームページをご覧ください。

第9回 神戸大学 ホームカミングデイ 検索

文学部でのホームカミングデイは、午後から!!



KOBE
UNIVERSITY

誘い合わせて、お気軽にお越しください!

文学部ホームカミングデイ2014

13:00～13:30	受付 文学部 B棟132教室
13:30～13:40	文学部長挨拶
13:40～14:40	講演 「心の社会性:比較文化研究からわかること」 石井敬子准教授
14:40～15:10	オックスフォード大学留学生の 学生チューター体験談
15:30～16:00	第8回文窓賞 授賞式 (学生レポートコンクール)入賞者授賞式
16:00～16:20	文窓会総会
16:30～18:00	懇親会 瀧川記念学術交流会館 (参加費: 3,000円/当日)

<併設企画> 12:50～16:30
(文学部 B棟132教室前)
・地域連携センター
・海港都市研究センター
・倫理創成プロジェクト
・日本文化社会インスティテュート

■お問い合わせ先 人文学研究科総務係
〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1
Tel: 078-803-5591

文窓会(文学部同窓会)ホームページ
<http://www.kobe-u.biz/bunsokai/>

講演 石井敬子准教授

人の心と文化の性質は相互構成的関係を持つ。近年注目を集める文化心理学が専門の研究者です。◆1998年3月京都大学総合人間学部基礎科学科卒業。2003年3月京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程修了、博士(人間・環境学)。2000年4月日本学術振興会特別研究員(DC1)、2002年4月北海道大学大学院文学研究科行動システム科学講座助手等を経て、2007年4月～2009年11月北海道大学社会科学実験研究センター助教に。2009年12月より現職。

*第8回文窓賞(学生レポートコンテスト)入賞者の作品は、ホームページ「文窓」でお読みいただけます。

(今年はぜひ、あなたも輪の中に!)

2013年のホームカミングデイは、藤井文学部長の挨拶で始まり、西光義弘名誉教授(言語学・英語学)による講演、留学生による報告があった後、文窓賞の授賞式が執り行われました。引き続いて行われた文窓会総会の後、場所を瀧川記念学術交流会館に移しての懇親会! 卒業生だけではなく先生方やホームカミングデイの運営をお手伝いしてくれた学生の皆さんも加わって、世代や立場を越えて歓談する明るい笑顔が見られました。

今年もぜひ誘い合わせて
ご参加ください!!



文窓

ふみのまど

神戸大学文学部 同窓会 文窓会

事務局: 〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1

☎ & FAX (078) 806-7207

(月、水曜日の午後3時以降)

<http://www.kobe-u.biz/bunsokai>

文学部: ☎ (078) 803-5595 FAX 078-803-5589

<http://www.lit.kobe-u.ac.jp>

12号
2014.9.30



特集/夢・愛・感動を 子どもたちに伝えて50年。

第8回文窓賞 学生レポートコンクール結果速報
同窓生の近況
神戸オックスフォード大学日本学プログラム
文学部ホームカミングデイ2014





池上会長を偲びつつ

人文学研究科長・文学部長
文窓会名誉会長 藤井 勝

本年2月に池上淑子会長が急逝された。まったく予想しなかったことであり、訃報に接した私たちはただただ驚くばかりであった。それから数ヶ月経つが、私たちはまだ失意のなかにある。会長は本当に直前まで精力的に活動をされており、平成25年秋(11月)には長年にわたる家裁調停員等としての社会貢献活動が評価をされて藍綬褒賞を受賞されたばかりであった。文学部・人文学研究科の教員でささやかな受賞のお祝い会を計画していたが、実現できなかったことは心残りである。

会長は文学部・人文学研究科のために全力投球で働いてくださった。同窓会長以上の活躍をされたと言っても過言ではなかろう。さまざまな同窓会関係行事の先頭に立たれたことはもちろんのこと、大学や文学部・人文学研究科の活動等にも積極的に関わってくださったからである。たとえば、文学部が主催する公開講座には毎回出席くださり、あとでいろいろ貴重な意見をいただくなどした。また有り難かったのは、文学部・人文学研究科そして研究科長室にも頻繁に足を運んでくださったことである。会長



魅力ある同窓会

文窓会副会長 16回生
武藤 美也子

「文窓会」会員の皆さまにおかれましては、お元気で活躍のことと存じます。

まず皆さまに悲しいお知らせをしなければなりません。会長の池上淑子様がこの2月6日に69歳で急逝されました。彼女は平成21年から会長をお務めになり、それ以前からも同窓会のお世話を長年なさって下さっていました。

彼女の突然の死により、副会長である私が会長代行を仰せつかることになりました。多くの部分を彼女に頼っておりましたので、彼女亡き後一つ一つの行事をこなしていく度に、彼女のやっていたくれたことの大きさを実感させられています。

今後は彼女の思いを受け継ぎつつ、魅力ある新しい文学部同窓会「文窓会」を作っていこうと思っています。皆さまの一層の応援とご協力をお願いする次第です。

魅力ある同窓会とはどのようなものか。卒業してすぐの時は同窓会など念頭になく、新しい環境に飛び込みその

は、神戸大学馬術部で学生に交じって馬術を習われていたので、その帰り道に立ち寄られることも多かった。その度に文学部・人文学研究科の問題や課題についてご相談し、一方、会長からは叱咤激励をいただくなどした。

会長は、とりわけ「神戸オックスフォード大学日本学プログラム」を中心とするオックスフォード大学との連携事業に対してご尽力くださった。(※12ページに詳細)

私が池上さんと面識を得たのは10年近く前である。当時はまだ同窓会の活動に関わり始められた頃ではなかろうか。大学の坂を登ってきた私が、早朝の乗馬練習からの帰り道の池上さんに偶然会い、すこし立ち話をするこもあつたし、ご夫君が自治官僚時代に書かれたご著書を、「専門が近いでしょう」ということでいただいたこともあつた。本当に話し好きの先輩という印象であつた。共に社会学専攻の出身であつたためか、会長になられてからも先輩後輩の関係で接していただいたことは嬉しかった。私が研究科長になってからは、会長には、二人三脚という気持ちで文学部・人文学研究科へご貢献いただいたというのが本当のところである。

昨今の国の大学行政の展開のなかにあつて、文学部・人文学研究科の現状は決して順風満帆というわけではないが、池上会長のご遺志、そして卒業生の皆様のご期待にそえるように、教職員が協力して文学部・人文学研究科の発展に尽くしたいと気持ちを新たにしているところである。

中で何ができるのか、眼差しは先の方ばかりを向いております。何年か経ち落ち着いてきたとき、特に現役を退く頃になると、もっとも多感であつた頃を過ごした大学での友や教師そして我が学舎が、自分の原点であつたことを感じ、その時を共有した友や場所に眼差しが向かう。その時に同窓会がその仲立ちになれば、それは魅力ある同窓会といえるのではないのでしょうか。

そのために現在文窓会が何を行っているかを紹介します。まず機関誌発行により、現在の大学の姿、他の同窓生の活躍の様子を伝えます。またホームカミングデイで、実際に学舎を訪れてもらい学友は勿論、恩師並びに現役の教員の方々と交流していただく。また在学生対象に文窓賞を公募しており、入選作品はホームカミングデイで手渡され、同窓会のHPにも載せられる。この文窓賞で我らの後輩がどのような夢を持ち、何に向かって進もうとしているかを知ることができ、そこに在学生との交流が始まる。

以上は文窓会の活動の中から同窓生との接点を中心にしての紹介です。

同窓生の皆さまには、かつての我らの青春であり基点である神戸大学文学部を、この同窓会「文窓会」を仲立ちにして、再び身近に感じていただければと思っております。文窓会へのご理解と温かいご支援をお願いします。

最後になりましたが文窓会会員の皆さまのご健勝とご活躍を心より祈念申し上げます。

神戸大学文学部生の人間力・文学力・未来を応援する

第8回 文窓賞 2014年

学生レポートコンクール 結果発表

神戸大学文学部に入学し、学生生活においてチャレンジしようとしていること、またなしえたこと、そのような目標や現状・体験をレポートしてもらく「文窓賞」レポートコンクールに、今年は去年より1名多い10名の応募がありました。9月4日に藤井文学部長、山本副学部長の先生方と文窓会役員による選考会が開かれ、白熱した討議の結果、下記の作品が受賞作に選ばれました。

最優秀賞 (表彰状と賞金10万円)

該当者なし

今回も該当者なしという結果になった。3年続きの該当者なしでこれでは詐欺だという人もいるかもしれない。決してそうではなく、選考委員会としてはこの賞には大きな期待があるのだ。若者にしか許されない生き様・挑戦・ビジョンについて、また個性ある新しい世界を我々に見せてくれる、そのような作品の出現を望んでいる。来年こそは我々をうならせる作品を待っている。

優秀賞 (表彰状と賞金5万円)

最優秀賞該当者がいなかったため、本来1名の優秀賞を今回は3名とした。

「詩人になれ」

赤羽 佳奈子(人文学科1回生)

世の中に役に立たないといわれる文学部をなぜ自分は志望したのか。一つの和歌、そして恩師との出会い。その中で気づいた言葉の世界の魅力。言葉とは一体何者なのか。言葉を選び世界を様々な視点から見つめることのできる人が「詩人」である。文学部は「詩人」になるための学部。だから私は文学部に入り詩人になる。題も的確で、出だしが問題提起ではじまり、様々な例を積み重ね、最後に「私は詩人になる」で終わる文章は、明瞭で読みやすい。ただ何か入試の小論文の定型を読まされているような感じを受ける。1年生で受験勉強を終えたところで仕方ないが、今後は自分の言葉を見つめる「詩人」を目指してほしい。

「二兎を追う者は二兎を得る」

伊石 昂平(西洋史専修2回生)

去年に続く投稿である。神大文学部においてこそ芸術と学問の一体化を目指すことができると入学した。一年たつてのチェロとの二人三脚の報告である。音大の学生に負けないコンクールでの成績、西洋史専修を選んでの学問との両立を目指す姿はよく頑張っている。「神戸大学が文芸両道のすぐれた大学であることを僕が実証したい」ということであるが、この方向は去年のレポートに書いていたことである。現実の学生生活の中で自分の世界がどのように拡がり新しい世界が見えてきたかを次には期待したい。

「真面目ボランティアの責任」

北川 和真(地理学専修5回生)

足湯ボランティアでの体験談。大震災発生の2011年8月から2ヶ月ペースで2014年の今まで続けている。このような地道な活動を長期継続させるのは大変なことである。その中でたどり着いた人と人の関係の難しさ、おもしろさ。片意地を張りすぎず、等身大の姿で接することにより、自分も相手もリラックスでき心を通い合わせることができるという発見。そして「飼ひ慣らしたものには、いつまでも責任がある」という言葉の意味を実感し、これからこのボランティア活動を続けていこうとする筆者。ボランティア活動に携わる姿勢を教わった気がする。これからは頑張っていきたい。

佳作 (賞金1万円) 「だんじり祭」 米谷 充史 (人文学科1回生)

参加賞 (図書券2千円) 〈文窓賞〉選考基準と選考委員についてはp10をご覧ください。

- * 優秀作の表彰は10月25日の第9回文学部ホームカミングデイに行います。
- * 入賞者の受賞レポートは冊子にして同日の文窓会総会時に配布いたします。

選考を終えて

応募者10名のうち1年生が5名という割合であつた。全体的に文章力においては去年よりレベルが上がっていた。テーマについては身近な話題が多く、内向き思考であり、小さく纏まりすぎている。これが最優秀賞に該当する作品がでなかった原因の一つでもある。賞には入らなかったが「マンガ小説」なる新ジャンルを考えだし、自分はそれを完成させたいというのがあつた。是非とも「マンガ小説」なるものを読ませていただきたい。「読ませる題をつけろ」と前回書いたが今回は全員が考えてくれており、総括を読んでいると安心した。全般に出だしはまずまずであるが、文章が進むにつれテーマが拡散していき、最後にはしりのないものになっているものが多かった。

来年は卒業であるが在学中ずっと文窓賞に応募してくれた学生がいる。その学生は「毎年文窓賞のレポート作りは一年かかりの大仕事である。まるでライフワークと化したこの賞のお陰で」多彩な経験を積み重ねたと書いてきてくれた。私たちとしては大変嬉しい言葉であつた。彼のように毎年文窓賞に応募するために自分の1年を振り返り記録として残すということは、己の成長に大いに役立つことだと思う。自分を見つめ、それを文章に書くことは骨の折れる作業であるが、この文窓賞をそのために使っていれば幸いである。

(総括・受賞作へのコメント 審査委員長 武藤 美也子)

< 3.11 被災地報告 >

これからを考え、 震災とともに生きていく。

*在学時代は神戸大学ニュースネット委員会の記者として、4年間、阪神・淡路大震災の報道に携わり、
3.11 当日は現地で72時間リポーターを務めた塚本さんからの最新レポートです。

東日本大震災から3年と半年が経過します。被災地・岩手にとって、この時間はとても長いものでした。引っ越した人も、やってきた人も、仕事を変えた人も、結婚して家庭を持った人も数多くいます。それぞれの立場が変わりゆく中、震災当時に中学2年生だった生徒は、高校3年生になりました。震災後から高校進学までの1年間、進路を考え直すことができた学年です。

夏の高校野球で、岩手代表として甲子園に出場した盛岡大学附属高校の前川剛大（たけひろ）主将もその一人です。彼は大槌町（おおつちちょう）の出身でした。震災の津波で実家は全壊。ユニフォームも、



大槌町 旧役場庁舎

バットも、グローブもすべて流されました。一時期は野球が続けられるか不安になり、進学先として盛岡大附属を選ぶのか、地元の高校を選ぶのかも迷ったそうです。それでも、家族や地域の支えで憧れの学校に進学。最後の夏にキャプテンとして夢だった甲子園出場を果たしました。「甲子園で頑張る姿を支えてくれた地元の人たちに見てもらいたい。地元を勇気づけたい」。そう話す前川主将の目からは、強い意志が感じられました。甲子園では、チームとして初めて夏の勝利を挙げました。感謝の思いは間違いなく伝わったはず。両親の住む仮設住宅には、前川主将を応援する横断幕が飾られていました。

さて、沿岸部を車で走っていると、新設された大型店舗やホテルが建ち並び、「被災直後」とも、「被災前」とも全く違う町の姿が目に見えてきました。復興のあり方についてこの場所で議論をするつもりはありません。大きな建物やホテルがあるからこそ、人の移動も活発になる一面もあるからです。遠方から買い物客や観光客が訪れることで、町は活性化します。震災以前から人口も観光客も少なくなっていた沿岸部だけに、これも新しい



岩手朝日テレビ
報道制作局 報道制作部
塚本 京平
(平成22年卒業 社会学専修)

町おこしなのかもしれません。

一方で、被災地の住民間では、観光客らがよく訪れる場所である「震災遺構」を残すべきか議論が重ねられています。「残っていることで震災を思い出す」という意見と、「残すことで様々な人が訪れる」という意見があるからです。大槌町の旧・役場庁舎は、震災の津波により全壊し、当時の町長と職員、合わせて40人が命を落としました。遺族をはじめ解体を望む人の意見も強くあり、6月からは本格的な解体工事が始まっています。町は玄関部分など一部の保存方針を表明していますが、復興ボランティアらが「保存すべき」と提出した請願を町議会が不採択にしているため、先行きはまだ不透明です。

一方で、宮古市田老（たろう）にある「たろう観光ホテル」は、国の支援を受けながら保存することが正式に決まりました。4階部分までが被災し、2階部分までは鉄骨しか残らなかった建物です。震災当時、ホテルの客室から津波の映像を撮影し、震災の伝承活動をしている社長の意向もあり、ホテルを別の場所で再建したうえで、今後も震災遺構として保存することになりました。ただこのホテルでは、震災による死者は出ていません。大槌町と異なる事情があったからこそ、残すことができたと言えるのかもしれません。



たろう観光ホテル

忘れてはならないのが、どの遺構の場合でも、保存を望む人も、解体を望む人もたくさんいるということです。自治体にとっては、残すか、壊すかの2択ではなく、今後どのように町を造るか、まで踏み込んで議論する段階がやってきました。陸前高田市の「奇跡の一本松」は、寄付金で保存工事が完了し、復興公園の一部に組み込まれました。震災後に迎えた4度目の盆も、この一本松には多くの人が訪れています。震災を忘れるのではなく、震災とともに生きていく。被災地での生き方について、私たち自身も改めて考える時期なのかもしれません。

ようこそ、新入生諸君！ 歓迎&学びのテーマ選びをサポート(文窓会主催 新入生歓迎ティーパーティー)

今年も文窓会主催の新入生歓迎ティーパーティーが、5月14日（水）に開催されました。恒例となったこのパーティーでは、春に入学した新入生が軽い飲食をした後、専門科目を担当される先生や院生と同じテーブルを囲みます。

今回は、今年から文窓会の運営に加わった河島真先生（神戸大学・大学院卒業）の軽妙な司会の下、藤井文学部長と武藤文窓会副会長の挨拶に続き、先生方の紹介へ…。その後、専修ごとに分かれて新入生は先生方と話し合います。今年はオックスフォード

生も加わり会場は一見華やか。でもみんな緊張しているのか、会場は静かで「今年の新入生はおとなしい」という印象を与えます。しかし、今年文窓賞への応募は新入生によるものが多いそうです。彼ら・彼女らはエネルギーを内に秘めた形で蓄えているのでしょう。

今年は、若干の手違いがあり、用意された軽食が例年に比べ少し精彩を欠いてた…ということを知った新入生の皆さんには内緒にしておきましょう。

(文責・坂本)



文窓会役員・西川京子さん (西洋史学専攻・17回生)の 著書『こんにちは香港』が新聞 に紹介されました。

神戸新聞の書評や朝日新聞の人気コーナー『一身二生』でも紹介された同書は、西川さんの初の自伝的エッセイ集。文学部卒→公認会計士→エッセイストとドラマティックな転身、渦中にいた1997年の香港中国返還前夜とその後…きっとハードルを超える勇気と元気がもらえる1冊です。(発行：編集工房ノア)

*写真の新聞記事は、検索&無料登録すれば「朝日新聞デジタル」でも読むことができます。



夢・愛・感動を 子どもたちに伝えて50年。

浜島代志子 国文学専攻11回生

神戸大学入学と同時に、めざすテニス部へ。“文学部テニス専攻”というくらい、テニスに明け暮れた学生時代。卒業は昭和38年（1963年）のOGです。

この夏、お声を掛けていただきフィリピン弾丸ツアーを決行。8月19日にフィリピン入りして絵本の「対話式・読み語り」をしてきました。校長先生は36歳、若い！

パワーがある。熱い情熱を教育に注いでいる。若い人が動いている。子どもたちの瞳が輝いている。私もパワー全開！



帰国してすぐ、東奔西走。子どもたち、子どもの心を持った大人たちが待っています。(次ページへ続く)

8月尼崎市の公民館で「対話式・読み語り」。対談する尼崎市長・稲村和美さん（神戸大学法学部OG）が手にする絵本は『はらべこあおむし』。

夢・愛・感動を子どもたちに伝えて 50 年。

絵本とミュージカルと…and more ますますパワフルに活動中です！

浜島 代志子（国文学専攻 11 回生）

50 年になる絵本の「対話式・読み語り」、そしてミュージカルの劇団天童を主宰して 20 年。「絵本は子育ての基本のキ」と唱える私の原動力は、大学を卒業して神戸市の中学教師になった時の、ある体験とそこから得た確信です。

■子どもたちに図書館を！ 神戸での闘い

大学を出て 1 年間の新米教師を体験した後、夫の転勤で千葉県松戸市に住むことに。当時の松戸は、都会から遠く離れた“文化果つる地”。教育環境に恵まれた神戸に生まれ育った私には、カルチャーショックだらけでした。今では、そんな松戸で子どもを育て、おはなしキャラバンや劇団活動を、娘や孫と一緒に舞台に立つなどしっかり根を張っていますが（笑）。

当時の最大の不満は図書館がないことでした。私たちの町に図書館を作ろう。周囲のお母さんたちに呼びかけて図書館建設運動を起ち上げ、市役所に何度も足を運んだ結果、お役所もようやく重い腰を上げてくれることに。市民センターの中に開設が決まったのです。ところが、職員はゼロ、運営はすべて私たちがボランティアで行うという条件でした。さらに、難問発生。図書館には本の分類整理や貸し出しなどの業務ができる司書が必要ですが、そんな資格や知識を持った人がいなかったのです。そこで、私が急遽通信教育とスクーリングで学び、おそらく最短に近い 6 ヶ月で資格を取って無事オープンへ。市民の図書館運営をしながら、おはなし会を開き、同時期に「松戸おはなしキャラバン」を設立。絵本の読み語り、人形劇、紙芝居、絵巻物、動画での語りなど、多彩な媒体を用いて絵本への導入を行いました。

■『はらぺこあおむし』と 作家エリック・カールのこと

絵本の読み聞かせにも既成のグループがあり、初めの頃は私の読み語りが強く非難されたこともあり。当時は、「静かに！最後まで黙って聞きな



い！読み手は淡々と読みなさい」という一方通行の読み聞かせが主流だったのです。

私はそれには反対でした。私は読み語り、主役は子どもたちです。口ぐちに自分なりの考えや想像を声に出してくれて、とてもにぎやかです。絵本は食材。語り手は料理人。どんなに上質な食材でも、おいしい料理に仕上がるかどうかは料理人の腕次第。「絵本は子どもの自由な創造力や才能を引き出すもの」という信念を貫き、子どもたちに問いかけ、考えさせ、一人ひとりを受けとめ、一緒にドキドキはらはらワクワクする絵本の「対話式・読み語り」を実践してきました。

でも、独りよがりになってはいけません。私は海外の絵本作家にも直に会いに行き、作家の思いを聞き、ノウハウを得てきました。世界中で愛読されている名作『はらぺこあおむし』で有名なエリック・カールさんが 1985 年に来日した時には、松戸まで来ていただきました。私の「対話式・読み語り」に興奮して舞台上に上がってこられ、カールさんと一緒に対話式で子どもたちにアプローチ。舞台上のカールさんと私、体育館いっぱいの子どもたちがひとつになった、本当に楽しく素晴らしい舞台となりました。

そのとき、「You're the best story teller（あなたは最高の語り手だ）」と褒めていただきました。カールさんに、「私のこの読み方でいいのですか？」と聞くと、「Good！Very good！」、「あなたは子どもの気持ちがよくわかっている」とも言ってくれました。やっぱり「対話式・読み語り」は間違っていない！と確信を得て、今に至っています。

■劇団天童、 ミュージカルは総合芸術

28 年にわたる松戸市での市民図書館運営、おはなしキャラバン設立・活動を経て、1995 年に『夢、愛、感動をお届けします』をテーマに劇団天童を設立。ミュージカル、語り芝居、人形劇などで子どもから大人まで楽しめる文化芸術活動を全国展開しています。作品は、日本昔話やグリム兄弟、アンデルセンの作品、ピーターパンなど様々な題材を原文を尊重しながら、子どもたち、親御さんたちへのメッセージを込めた脚本に仕上げた私のオリジナル。古事記編纂から 1300 年といわれた 2012 年に初演したミュージカル『アマテラス～和を誓った母～』もそのひとつです。もともと日本の古代の物語に惹かれ、自分なりに勉強をしてきましたが、日本中の神社の伝承を調査して、そこから古事記・日本書紀にとらわれない神社伝承史学を唱える古代史研究家・小椋一葉さんを知り、その数々の著書や講演に触れて強く触発されたのです。小国家が乱立し戦乱を繰り返す古代にアマテラスが伝えたかったのは「和の心」。それをテーマに 20 年間抱き続けた夢とロマンを脚本にした手作りのミュージカル。この先も大切に上演していきたいと思っています。

■なぜ絵本？ 私の卒業 1 年目の教師体験

私を原点である絵本に駆り立てたのは、文学部国文学科を卒業して神戸市立中学校で国語の教諭をした時の体験です。私は 22 歳、生徒は 15 歳。新米教師にとって子どもたちの反応は新鮮な驚きでした。私



が、楽しい授業をすると顔が輝きます。でも、指導書通りにするのはつまらないなと思いながら授業をすると、たちまちぶうつとした顔をするのです。

よし、ならば、生徒が喜ぶ授業をしてやる！私が始めたのは、物語り文を感情込めて声に出して読む、また生徒が読む声に耳を傾ける。文を仲立ちにして生徒と語り合うことでした。すると、子どもたちはどんどん読み方がうまくなるし、内容をみずみずしい感性でとらえてゆくではありませんか。漢字の書き取りなんてそっちのけで本読みに没頭しました。意外なことに、私が受け持つ組はいつも良い成績を取りました。国語の成績だけでなく、数学など他の教科も上がり生徒に変化が現れたのです。

ところが、大きな壁！保護者のお母さん方から「もっと、受験向きの勉強を」というクレームが来たのです。落ち込む私に勇気をくれたのは生徒たち。「先生は先生でええんや」と。よし、ならば、もっと、おもしろい授業や！子どもたちに書く力をつけてあげよう。私は 5 人位に班分けしてリレー童話を書かせたのです。子どもたちの盛り上がること。

しかし、一人どうしても書けない子がいました。神戸でも難しい進学高をめざす優等生でした。授業が終わって二人だけになり尋ねると、「ぼく、童話って知らない」という答え。幼い頃にも絵本を読んでもらった経験がなく、言葉の力も想像する力も未熟だったのです。その子の母親が学校に乗り込んできました。「中学生に童話を書かせるのは止めてください。受験に出ますか！」と、えらい剣幕。そんなことがあった後、毎日のように家庭教師が来て勉強漬けだったその子は成績が伸びず、友だちともうまく関われないまま卒業していったのです。「絵本なくして人は人にならない」と思い知らされた体験でした。

東日本大震災で「絆」が重要視され、今の社会で最も必要とされるのが「感受性や愛」だといわれます。思いやりの心、素直な心、親や大人を尊敬する心、賢さ、創造力、リーダーシップをとる行動力などは、絵本やミュージカルを通じて育むことができる。それが私のライフワークだと思っています。

最後に同窓会の皆様におくるメッセージを。

どうか、未来を生きる子どもたちにたっぷりの愛を注いでくださいね！

YouTube で下記を検索して対話式・読み聞かせをご覧ください。だけです。「熱狂絵本 _ 浜島代志子 _ はらぺこあおむし」

平成 25 年度卒業生 文窓会に新しく仲間入りしました！

卒業おめでとう！文窓会のニューフェイスたち。 文窓会主催 卒業記念ウェルカムパーティー

3月25日午後2時半から「LANS BOX」2階にて、恒例の文窓会主催による平成25年度卒業・修了祝賀会が開かれました。午前中、神戸ポートアイランドホール（ワールド記念ホール）で行われた学位記授与式（学部・博士前期）を終え、会場は晴れ着・スーツ姿の卒業生たちのすっかりリラックスした笑顔で埋め尽くされました。



人文学研究科に進学。

齊賀 万智（国文学専修）

文学部を卒業し、この春、人文学研究科に進学いたしました。膨大な史料や文献を批判的に読み自らの論を構築する作業は決して容易なものではなく、泣きたくなることも多いですが、その一方で、学問を究めることの喜びをひしひしと感じながら大学院生活を過ごしています。大学入学時には自分が院に進むなど全く予想していませんでしたが、国文学の魅力や存分に伝えて下さった先生方や友人のお陰で院進学を決意し、今、その道を自信と誇りを持って歩むことができています。そして、その歩みを支えてくれた家族にも感謝の念で一杯です。

私は博士前期課程修了後、兵庫県立高等学校の国語教師として採用される予定です。高校は人生の分岐点であり、高校教師の果たす役割の大きさに一抹の不安を感じますが、生徒の人生の選択に関わることができることを誇りに思い、そして高校時代の恩師に言われた「努力して、必要とされる人間にならなさい」という言葉を胸にいつまでも努力し探究し続ける、そんな教師を目指して、この大学院での生活を送っていききたいです。



出身地で就職して。

姉川 拓生（英米文学専修）

私は現在、出身地に本社を置く地方スーパーに正社員として就職し、研修に OJT にとあわただしい毎日を送っています。社会人生は当然ながら環境が異なり、初めは戸惑うこともありましたが、しかし、忙しい毎日の中でも、大学生活で培った考え方や信念を持ち続けることで、自分のモチベーションにつなげています。

多くの人と出会い、さまざまな考えに触れ、それを自分の考えと比較しながら適応・発展させていく力は文学部で学び身につけたものです。社会人になってから、その力がさらに求められています。大学生活はもちろん、過去の経験がすべて今の自分につながっていることを実感しながら、充実した毎日を送っています。



成長の原点。

佐伯 健太（地理学専修）

大学4年間を過ごした神戸を離れ、故郷の香川に戻り、新たな生活が始まりました。

勉強、部活、アルバイト、旅行、やりたいことを好きなだけできた大学生活で、僕は大きく成長しました。

県の環境政策課で、地球温暖化対策に関する仕事を始めて数カ月。分からないことだらけで自分の力不足を感じる日々。担当の仕事に関しては、組織の中で僕が一番の専門家でなければならない。いつも「もっと勉強しておけばよかった」と後悔します。

それでも今を頑張れるのは、大学での勉強や経験のおかげ。課題や問題点を見つけ、自分たちで解決していく大学での勉強や経験は、僕の大きな支えとなっています。

勉強とともに必死に取り組んだヨット部での活動。都合がつけば後輩の姿を見ようと西宮の海に足を運びます。どれだけの時間をこの西宮の海で過ごしたか。後輩の姿と西宮の海も、また僕を支えてくれる存在です。

先のことなんて分からない、しかし今を必死に生きなければ先はない。大学時代は目の前のことに悩み、苦しむこともありますが、自分がやりたいこと、



進みたい道に自信を持てば道は開かれます。僕も社会人としての第一歩を踏み出したばかり。4年前神戸の地に足を踏み入れた時の心躍る気持ちを忘れず、これからも歩みを進めていきます。

（公務員）

新人役員の自己紹介。

田中 康二 (国文学専攻・36 回生)

昭和 63 年に文学部を卒業した 36 回生の田中康二と申します。卒業後は大学院文学研究科 (修士課程) および大学院文化学研究科 (博士課程) に進学しましたので、生粋の神大文学部出身者ということになります。専門は学部時代から国文学、とりわけ近世 (江戸時代) 文学を中心に勉強しています。指導教官はやはり学部時代から一貫して野口武彦先生でした。野口先生には博士号までいただいたので、我が生涯第一の恩師ということになります。そうして 2001 年に野口先生の後任として神戸大学に着任しました。それ以来、文学部では国文学専修、大学院では国文学教育研究分野に所属し、日本近世文学の担当として働かせていただいています。

このたび、文窓会の役員の方にお声掛けをいただき、母校に勤める者にもできる仕事があるという温かい言葉をいただいて、役員会の末席を汚すこととなりました。仲間入りに際して、最初のお仕事が本誌で自己紹介をすることだとのことですので、簡単ながら研究対象を記すことで自己紹介に代えさせていただきます。

さきに日本近世文学が専門であると記しましたが、より詳しく言えば、国学がど真ん中の専門ということになります。「国学」とは、江戸時代中期に発祥した学問で、日本の古代文学や古代語を研究し、古代の精神を復元することを目的とする学問であって、現代のあらゆる日本学のルーツにあたるものです。私自身、若い時は文学青年ではなく、どちらかといえば思想的なものに関心を持って国文学専攻に進学したので、文学と思想のキメラである国学に興味をおぼえたのは当然の成り行きかもしれません。卒業論文以来、本居宣長や村田春海といった国学者の事跡や、近代以降に国

学がどのように享受されたのかということを継続して追究しています。これまで世に問うた著作としては、『村田春海の研究』(2000 年)・『江戸派の研究』(2010 年、以上汲古書院)、『本居宣長の思考法』(2005 年)・『本居宣長の太東亜戦争』(2009 年)・『江戸の文学史と思想史』(2011 年、共編、以上ベリかん社)、『国文学史再考一のぞきからくり本居宣長』(2012 年、新典社)・『本居宣長—文学と思想の巨人』(2014 年、中公新書)などがあります。最近是一般読者に対して専門領域の魅力を伝えることが重要であるということに気づきました。

とはいうものの、この文章を最後までお読みになってお気づきかと思いますが、まったく国学の魅力が伝えられていないことに、私自身忤怩たる思いを抱いております。まだまだ精進が足りないことを痛感する今日この頃です。以後お見知りおきいただければ幸いです。



(文学部 国文学専修教授)

第8回 文窓賞2014年 学生レポートコンクール 選考基準と選考委員

◎選考基準: 元気で個性的な学生生活の独創性や発展性に対する評価と、その活動や体験が社会をどれだけ納得させる力があるかによって選考。

◎選考委員: 藤井 勝学部長(社会学教授) 山本 秀行副学部長(英米文学教授)
武藤 美也子 鞍井 修一 日高 健一 花木 直彦 廣野 幸夫 西川 京子 吉田 浩次
田中 賢司 坂本 直樹 三宅 征彦 田中 康二 河島 真

神戸オックスフォード日本学プログラム 第2期生を修了して。

*ご寄稿は原文を尊重しています。

日本人の友だちができて気づいた 人間関係と文化の違い

ドッド・シャーロット(Dodd, Charlotte Emily)



去年10月から今年8月にかけて、日本の神戸市で日本語を勉強しました。到着の前に、もちろん色々なことを心配していましたが、此れまで神戸大学で勉強してきたことは

すごく楽しい経験でした。あっという間に日本の生活を完全に慣れてきました。外国人なのに、アウトサイダーなりに扱われないで、私が本当に属しているような気がしました。

神戸大学文学部は留学生のために日本の文化を経験するチャンスをよく提供してくれました。日本に来てから、広島、奈良、といった面白い町にフィールドワークをしに行って、毎週の水曜日、International Hourで茶道やカルタや漫才などについて習う機会がありました。学術的側面は、日本語の授業に限らず、同学部にある講義に出席しています。また、この大学では、留学生として、新しい友達を作りやすかったです。文学部での交流に加えて、Trussという留学生支援ボランティア活動やイベントを企画するグループのおかげで、楽しいイベントに参加できて、日本人の学生も他の留学生と遊んだり、友達になったりする機会は多かったです。

来日して最も驚いたこととその理由については、留学していた間に、日本人の友達がたくさんできて、大事な人間関係と文化の違いに気づきました。例えば、日本人は、他の国の人と比べると、相槌の使い方が全く違います。一般的に、日本人は相手の話を聞いている時、ずっと「ええ」とか「そう?」とか「はい」といった相槌を打ちます。そうしないで、ずっと黙っていると、かなり失礼だと考えられる可能性があります。なぜなら、相槌をよく使うことが、相手の話を聞いているのをみせるためですから。しかし、私たち外国人が話している間に、相手がずっと相槌を打つと、話の邪魔になって、迷惑のようです。「うん、もうわかったよ」とか「早く言ってよ」という意味だと思う外国人もいると思います。そのように、相手がどこの国の人かをまず考えて、聞き方を適応させた方がいいと習いました。この文化の差は本当に面白いと思いました。



結局、一年間留学することによって、日本語だけではなくて、数えられない文化的、社会的な違いを習う機会をもらいました。日本語は母国と本当に別世界だと思えるようになりました。この経験のおかげで、外国に住むことが自分を成長させると目覚めました。



神戸大学の皆様、本当に素晴らしい経験をくれて、どうもありがとうございました!

合気道を通じて 「上下関係」に触れた貴重な体験

ヨスト・マックス(Jost, Maximilian Conrad)



私は、高校生の頃、神戸で3年間過ごしたことがあるので、今回神戸大学で何か新しいことや刺激的なことに出会えるとは思っていませんでした。しかし、自由な大学生活に驚きました。初めてカラオケを楽しみました。日本のあちらこちらに旅をしました。そして、合気道道場

の人達と親しくなりました。より親しくなるにつれて日本人の、私にとっては、新しい面が見えてきました。「上下関係」に関してです。もし尊敬する「先輩」がいれば、素晴らしい関係を築くことができます。先輩を尊敬するという考え、あるいは、ヒエラルキーのような上下関係に価値があるという考えは、ドイツでは足早に消えています。それゆえ、日本のヒエラルキーと言えるかどうか分かりませんが、たとえその一番下の位置であっても、その良い部分を見ることができたのは貴重な体験でした。

大学で最もエキサイティングな行事は、3月に行われるクラブ活動への新入生勧誘のイベントでした。オックスフォードでも“Freshers' Fair”(新入生歓迎祭)と呼ばれる非常によく似た催しがあります。神戸大学の催しは屋外で行われるので、より祝いのムードが盛り上がります。一方、オックスフォードは“Examination Schools”で開催されるため、少し重々しい雰囲気があります。

最後に神戸大学、特に文学部の皆さまに心から感謝を述べたいと思います。そして、共に過ごしたこの素晴らしい時を思い出すために幾度も戻ってこれたらと願っています。

7月30日、瀧川記念学術交流会館にて 神戸オックスフォード日本学プログラム 第2期生修了発表会・修了式が行われました。

神戸オックスフォード日本学プログラム第2期生の修了発表会・修了式が、瀧川記念学術交流会館で開催されました。



修了発表会でのプレゼンテーション

今年、1年間のプログラムを修了したのは12名。発表会では、1人1人が各自のテーマについて日本語でプレゼンテーションを行い、その後の質疑応答に臨みました。引き続き行われた修了式では、藤井勝人文学研究科長・文学部長より各学生に修了証が授与されました。その後、同交流会館1階の食堂で



修了式で修了証授与

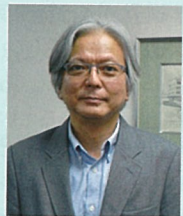
開かれた記念パーティーでは、担当された先生方や教務関係者、同窓会関係者と名残を惜しむオックスフォード生の姿が見られました。昨年より始まったこのプログラムへの関心は高く、大会議室で開催された発表会には多くの方が参加され、活発な質疑応答も見られました。また福田秀樹

神戸大学長、井上典之国際交流担当理事のご出席を得たのはもとより、オックスフォード大学からも、フレスヴィグ東洋学部長、同大学日本事務所のピール代表、さらには同大学で日本語を教える萩原順子先生、原田啓子先生も参加されたことをご報告させていただきます。



なごやかな修了記念パーティー

池上会長とオックスフォード大学連携事業



人文学研究科長・文学部長
文窓会名誉会長 藤井 勝

池上会長にご尽力いただいた事のなかでも忘れてはならないのが、とりわけ「神戸オックスフォード大学日本学プログラム」を中心とするオックスフォード大学との連携事業に対して我が事のように深い関心をもたれ、同窓会によるさまざまな支援を先導してくださったことだ。例えば、プログラム第2期生のためのJASSO奨学金申請が認められないという事態が発生し、私たち教員はプログラムの将来に対して悲観的になりかけたが、会長はその雰囲気を引き払っ

て状況打破の積極的行動をとられ、同窓会からの支援の可能性を模索したり、学内外の関係者にいろいろと働きかけたりしてくださった。おかげで、最終的に神戸大学から特別に奨学金を第2期生に支給する処置がとられ、オックスフォード大学側からも大いに感謝されることとなった。残念なのは、第3期生のためのJASSO奨学金申請が無事に採択されたことを報告できる前に、会長が亡くなられたことである。



明るくあたたかな人柄を写すように
大勢の方に慕われ惜しまれました。

文窓会前会長 池上淑子さんを偲ぶ

文窓会前会長池上淑子さんが突然倒れられ、集中治療室での治療の甲斐なく2月6日逝去されました。葬儀・告別式には池上さんの交友の広さを物語るように、多数の参列者が別れを惜しみました。改めて文窓会会員各位とともにご冥福をお祈りしたいと思います。

池上さんは社会学専攻16回生、昭和43年（1968年）卒業され、その後も折に触れ母校と文学部、文窓会、近年は馬術部にも心を配られ、多くの方々の敬愛を集めてこられました。

文窓会会長としては、平成21年11月から足掛け5年間、文窓会の発展と事業の充実こそが神戸大学と文学部の発展の一助になる、という熱い思いでわれわれ役員一同をリードされました。さらに昨年4月からは神戸大学全学同窓会「学友会」の副会長も務めておられました。

機関誌「文窓（ふみのまど）」や学生レポートコンクール「文窓賞」の充実などを図る一方、毎年のホームカミングデイ当日の文窓会総会の開催、「新入生歓迎ティーパーティー」の企画開催など文窓会の事業活動をエネルギーに推進されました。

また、文窓会の懸案であった常設事務局も、池上さんの尽力と文学部の協力により昨年文学部内に開設され、さあこれから一層の文窓会の発展をという時にかけがえのない人を亡くしたことは残念でたまりません。

池上さんの交友は神戸大学関係でも、元学長や本部教職員、文学部長、文学部新旧教職員の方々は言うに及ばず、学友会や他学部同窓会の方々、大学生協職員、馬術部の学生諸君など幅広く、急逝を惜しむ多数の声が文窓会に寄せられました。

5月23日には、そんな声をお寄せくださった多数の方々に加え、御夫君池上徹氏と実兄瓜谷博氏を迎えて、「池上会長を偲ぶ会」を開催いたしました。

今後は残された役員一同、遺志を引き継いで文窓会発展のために尽力いたしますので、文窓会会員各位の一層のご支援をよろしくお願いいたします。

また、来る10月25日のホームカミングデイ当日の文窓会総会において、池上さんの後任の新会長を選出する予定ですので、文窓会会員各位の多数の出席を賜りますようお願いいたします。また、総会終了後の懇親会にて池上さんの思い出や、文窓会へのご意見など語り合いませんか。

（文窓会幹事長 廣野幸夫）



「池上会長を偲ぶ会」（5月23日）

人生の先輩・馬術部の“仲間”に感謝。

神戸大学馬術部

池上さんが縁あって我が部で馬に乗り始めたのは平成17年のこと。60歳を過ぎて始めた馬術。学生と共に早朝練習に励み、ゆっくと、しかし着実に上達していく池上さん。挑戦する気持ちを忘れないその姿が、とても印象的でした。実を言うと、学生は池上さんの素性をほとんど知りませんでした。「会長だなんて！藍綬褒章受章！？…こないだ叱りすぎたかも…（冷汗）」という感じです。そのくらい我が部に打ち解けていたのです。池上さんは、我が部の

良き理解者でもありました。新勸のお手伝い、差し入れの上質なお肉、試合場での応援。時には人生の先輩としてアドバイスを下さいました。思い出は尽きません。今年10年目を迎えまだまだこれからという時に突然のお別れとなり残念でなりません。



凌秀号に騎乗する池上さん。現役部員と共に。

東京支部便り

第11回文窓会<東京支部>総会(2015年2月開催予定)のご案内

日 時	2015年2月26日(木) 14時～17時
場 所	東京六甲クラブ(日比谷帝劇ビルB2) Tel: 03-3211-2916
議 題	同日、18時より東京六甲クラブ主催の「木曜会」(担当:文窓会。講師・講演内容は別途連絡)が開催されます。総会および木曜会への積極的参加を切にお願い致します。

第10回文窓会<東京支部>総会のご報告 開催:2013年10月24日(木)

参加者 竹歳一夫(S32年卒)、河野房子(S35年卒)、白藤禮幸(S36年卒)、中野裕(S36年卒)、(敬称略) 五味尚子(S37年卒)、田中勉(S47年卒)、岡真知子(S47年卒) 池澤雅弘(S53年卒)。

ゲスト 文窓会会長・故池上淑子(S43年卒)

※池上淑子様には、病氣療養中のところ、2014年2月6日に逝去されました。文窓会を精力的に引率された功績は大であり、早すぎるお別れになってしまいました。惜しい人を亡くし残念でなりません。衷心より哀悼の意を表します。



総会のあと、文窓会担当の木曜会を開催しました。

講師 神戸大学大学院人文学研究科准教授 古市晃先生
講演 「聖徳太子の虚像と実像」

文窓会東京支部の皆様にお願いたきこと:

すでに書状およびEメールで一部の方にはお願いしていますが、東京六甲クラブの会員増強に力を貸していただきたいとお願いするものです。文窓会の会員の推移は下記です。ノルマは50名です。

平成23年度:30名 24年度:25名 25年度:23名 26年8月末現在:23名

文窓会東京支部:会長:中野 裕(S36年卒) 副会長:五味 尚子(S37年卒)、田中 勉(S47年卒)
問い合わせ先:〒223-0064 横浜市港北区下田町1-1-113 中野 裕
電話・FAX:045-561-6317 Eメールアドレス:y.nakano.1938-panda@d9.dion.ne.jp

中部支部便り

追悼 池上淑子さん

池上淑子さんから届いた今年の年賀状、新年のあいさつに続いて「昨春秋、藍綬褒章を受け、仕事もひと区切りです」の近況が記されていました。お祝いの電話をかけると「恥ずかしいね、照れますよ」と、いつものトーンが帰ってきました。これが最後の会話になるとは思いもしなかったです。

私と池上さんは同期生で、昭和39年入学組。神戸大学各学部が六甲へ集まった初年で、東京オリンピックが開催された年です。広々とした六甲ハイッ跡地は、こじんまりとした文学部1棟、理学部2棟だけで、あとは草原。すべてがおおらか、自由がいっぱい。そんな雰囲気の中で学んでいたのが彼女です。当時の名は瓜谷淑子。私には池上淑子より瓜谷淑子の方が感覚的には近いかも知れません。

彼女と再び接点ができたのは、卒業から40年を経過していました。文窓会中部地方のお世話係りを担当することになり、池上さんが神戸の本部からエールを送ってきました。池上さんは人を頼もしく感じさせる不思議なパワーを持っています。中部支部の総会・懇親会にも何度も出席していただきました。いつも熱っぽく文窓会の意義を語っていました。

彼女の口癖は「10月のホームカミングデーにどうしたら一人でも多く来てもらえるか」でした。今年はこのセリフを聞くことができません。何年か後に、不思議な世界で巡り合えるでしょう。その時は「結構増えたよ」と伝えてあげようと思っています。友よ、安らかに。合掌

中部支部 勝原 博



文窓会(文学部同窓会)——会計報告——

平成25年度収支計算書

(平成25年7月1日～平成26年6月30日)

【収入の部】

前年度繰越金	¥22,540,687
今年度収入合計	¥4,509,520
会費納入金	(3,720,000)
協力金	(679,000)
受取利息	(14,520)
行事受取会費	(96,000)
収入合計	¥27,050,207

【支出の部】

事業活動費	¥2,880,110
会報費	(1,323,140)
歓送迎会費用	(427,300)
総会費	(350,000)
文窓賞費	(312,270)
名簿管理費	(172,130)
ホームページ管理費	(63,270)
新入生歓迎記念品	(210,000)
人件費	(22,000)
協力金費	¥880,000
学友会費	(110,000)
活動援助費	(100,000)
学術助成費	(650,000)
学祭援助費	(20,000)
事務局費	¥818,465
事務業務委託報酬	(600,000)
家賃、光熱費	(104,172)
その他事務局費	(114,293)
支払手数料	¥56,654
旅費交通費	¥55,850
会議費	¥112,494
交際接待費	¥108,580
慶弔費	¥65,479
雑費	¥6,170
今年度支出合計	¥4,983,802
次年度繰越金	¥22,066,405
支出合計	¥27,050,207

平成25年度財産目録

(平成26年6月30日現在)

I. 資産の部	¥22,066,405
現金	(81,997)
(池田泉州銀行) 普通預金	(111)
(みなと銀行) 普通預金	(337)
(ゆうちょ銀行) 普通貯金	(356,561)
(ゆうちょ銀行) 振替口座	(2,841,060)
(みなと銀行) 定期預金	(8,061,500)
(みなと銀行) 定期預金	(1,006,174)
(みなと銀行) 定期預金	(1,508,665)
(ゆうちょ銀行) 定期貯金	(8,210,000)
II. 負債の部	¥0
III. 正味財産合計	¥22,066,405

事業年度に係る決算報告書を監査した結果、適正であることを認めます。

平成26年8月4日

会計監査 花木直彦 印
会計監査 西川京子 印

神戸大学学友会のご案内

神戸大学学友会は各学部同窓会の相互交流と大学の発展に寄与するため、同窓会の連合体として組織され、各学部同窓会から選出された人々による幹事会で運営されています。具体的な活動としては、幹事会や大学役員との懇談会のほか、大学広報紙「風」編集委員会、神戸大学クラブ(KUC)運営委員会、データベース委員会などです。

神戸大学学友会を構成している同窓会:事務局は〈神戸大学企画部社会連携課〉

●文窓会(文学部) ●紫陽会(教育学部・発達科学部) ●社団法人 凌霜会(経済学部・経営学部・法学部・国際協力研究科)
●くさの会(理学部) ●社団法人 神緑会(医学部医学科) ●就進会(医学部保健学科)
●社団法人 神戸大学工学振興会 KTC(工学部) ●六條会(農学部) ●翔鶴会(国際文化学部) ●海神会(海事科学部)

「神戸大学クラブ」(K・U・C)に入会しませんか

神戸大学卒業生が学部の壁を越えて、交流をはかり親睦を深める集いです。(神戸、大阪、東京でそれぞれが活動を展開)

ご入会ご希望の方は TEL 078-334-1323 までご連絡ください。(K・U・C運営委員 日高 健一)

文窓会ホームページをご利用ください!

卒業生や大学関係者のみなさんの交流の場です。いろいろな形での利用が可能ですので利用を希望される方は下記メールアドレスまでご連絡をお願いいたします。kobeuniv.sakamoto@gmail.com(担当:坂本/文窓Web担当、社会学32回生)

文窓会役員(平成26年9月末現在)

副会長 武藤美也子(43年卒・国文学)

<その他の役員>

日高 健一(36年卒・芸術学) 花木 直彦(36年卒・国史学) 田中 賢司(42年卒・社会学) 廣野 幸夫(43年卒・社会学)
吉田 浩次(43年卒・社会学) 西川 京子(44年卒・西洋史学) 田中 睦子(46年卒・芸術学) 坂本 直樹(59年卒・社会学)
宮崎 典久(63年卒・国史学)

●協力:

三宅 征彦(41年卒・社会学) 田中 康二(63年卒・国文学) 河島 真(H3年卒・国史学)

表紙の題字は、文学部国文学教授 福長 進先生にご依頼しました。

<http://www.kobe-u.biz/bunsokai/> (検索→文窓会)